

影浦 峯 著

『3.11後の放射能「安全」報道を読み解く
—社会情報リテラシー実践講座—』

現代企画室 2011年 新書版 193頁 ¥1050(税込)

中村百合子

3.11とそれにつづいた福島第一原子力発電所の事故後の日本の社会状況は、情報リテラシー—誤解を恐れずに思いきりひらたくいってしまえば、情報にまつわって新たに提唱されているリテラシー—とはいったいどのような力なのかをじつはわかっていなかった、またはわかってはいたけれど、自分はその力を身につけてはいなかった、という気づきを多くの人に与えたのではないだろうか。かくいう私が、そのような反省をしている。今、情報リテラシーの育成のあり方を、その育成を唱導してきた図書館・情報専門職の社会的に果たすべき役割を、根本から問い直す必要性を感じている。情報リテラシーに精通しているはずの私が、3.11直後、社会の情報の渦の中にのみこまれ、ただ自らのことでいっぱいになって、もたもたおろおろとしていた。そんなところに、この書『3.11後の放射能「安全」報道を読み解く—社会情報リテラシー実践講座—』の出版が聞こえてきた。著者は、言語学、情報学の研究者で、東京大学大学院教育学研究科教授の影浦峯氏である。

日本において情報リテラシーやメディア・リテラシーなどの育成の必要性を唱えていた者—その中にこの書の著者の影浦氏は入らない—が、ほとんど、この緊急事態にあって、社会的な存在感をもって行動できなかった。知的自由を平時（と認識しているとき）にいうのはおそらくたやすい。むしろ知的自由が侵されている（ような抑圧的な状況の）ときにこそ、声は出されなければならないはずだ。情報リテラシーなりメディア・リテラシーなり、クリティカル・シンキングやメタ認知の力なりの重要性を、これまた平時（と認識しているとき）に唱えるのもおそらくたやすい。だが、

誰もが情報との距離感をつかめず、メディアといかに向き合うかについて不安なとき、その力を率先して発揮して発言、行動することは、その教育の必要性を訴える者の義務ではなかったか。

本書を今年、紹介すべき一冊と判断した理由はまず、影浦氏がこの一冊の出版をもって問いかけているのは、リテラシーとは実践的なものであるはずではないかという、3.11後の今も続く日本の知性の危機にあって問われるべくして問われた本質的なことだと感じたからである。情報リテラシーなりメディア・リテラシーなりの育成を唱導してきた私たちが、3.11後の情報の混乱のなかで、そのリテラシーを発揮して行動し、模範を示すことができなかったのは、このリテラシーというものの本質を忘れていたからではないのか。どこかで誰かによって提唱されはじめた何とかリテラシーというものについて、ただ知っていることを教えることが目的化して、それに満足してしまっていたのではないかと、私はこの書に考えさせられた。

3.11後、専門家、政府、マスメディアが「安全」「安心」「普段どおり」という言葉を繰り返し私たちに押しつけてきたとき、ただほかに自分が信じられる情報を探し回るのではなく、そのような言葉、メッセージが日本社会を満たすことのおかしさを、この情報やメディアにまつわる力の育成を唱導してきた私たちが、きちんと社会に向けて指摘し説明できていたなら。そうしてこそ、そのような新しいリテラシーとは、どのような力で、どれだけ重要なものかを、示すことができていたのだろう。

この書を今年、紹介すべき一冊と判断したもうひとつの大きな理由は、情報の選択・活用にかかわる判断に有用なくつかの視点や方法を、この書がきわめて明晰に提示しているからである。またその有用性をこの書の議論の説得的展開そのものが示していると感じたからである。

影浦氏はこの書で、今回の「安全」報道を例に、「政府やメディアが報じている情報をどのように読み解くことができるか、そして状況をどのように判断することが適切なのか」（p.6-7）にか

かわって、「混乱した情報を自ら整理するための視点と指針」(p.6)を複数、示している。とくに、「事実と突合わせることで報道の誤りを検討する」(p.173)のではなく、報道を「言葉に即して読み解く」(p.173)、ということを実際にやってみせてくれているところが、貴重である。従来、情報の判断では、その情報が「事実か」「正確か」にまず焦点があてられていたと思うが、現実の世界には、原発事故のように、「事実か」「正確か」を確認したり判断したりすることができる状況にあることは多くないだろうから。

情報の主体的な読み解きと判断は、情報リテラシーの根幹であろう。今は日本の教育界で、情報教育が育成すべき「情報活用能力」として広く知られる力は、臨時教育審議会の第二次答申においてはじめて言及されたときには、「情報活用能力(情報リテラシー—情報および情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的な資質)」として、情報化社会において読み・書きと並んで重視されるべき能力とされていた。以来、その概念や育成法についての議論は積極的に続けられてきたが、しかし、その力の核と考えられるだろう情報の主体的な選択・活用の方法は、過去、この書ほど具体的に明晰には語られていなかったかもしれない。この書で影浦氏が指摘しているものが、管見の限りでは、抜け落ちていたように思う。

そうしてこの書で示されている視点、指針のうち、今回おそらくもっとも影浦氏が重要視しているものが、「概念のレベル」という視点である。この視点は、8章立てのこの書で、2(章)で示され、6(章)まで一貫して報道を整理するための枠組みとして有効に使われている。影浦氏はつぎのように述べている。「質的に異なるレベルの話が混在している記事を的確に読み解くためには、基本的なレベルを整理し、把握しておくことが有効です。」(p.16)。そして、今回の報道について、「科学的な知見」；「社会的な見解(法律や基準など)」；「個人的な判断(安全か危険か)」；「個人の心理状態(安心か不安か)」と、それらすべてに側面か

ら関係し背景的に存在する「誰にとっても変わらないもの」を加えた五つのレベルに、使われている言葉を整理して、議論の逸脱や飛躍などがあって不適切な部分を認識する方法を示した。言葉の定義や数値の基準といった基本的な知識を、資料(辞書や社会的な基準等)を参照にしながら適切に理解していれば、この指針はとても有効であることを、この書の議論に見てとることができる。

加えて、5(章)では、事前の視点から考えるべきことを事後の視点から語ること、本来は比べられないはずのものを比べることなどから起きる情報の混乱も、非常に影響が大きいことが示されている。前の言葉のレベルの問題もそうだが、この事前事後や比較の問題は、その本質をつかむためには、おそらく高校数学の代数の基礎の基礎(群など)に立ち返って私は学び直さなければいけないところだと感じた。

また、報道等の情報について、この書の冒頭には、「本書では、基本的な事実や社会的に共有された知見を手がかりとするのはもちろんですが、報道の構造や配置、そして報道が担っている役割を、できるだけ報道で使われている言葉そのものに即して診断していくことが主な課題となります。」(p.7)とあり、「報道で使われている言葉そのものに即して診断していく」ことで、報道の構造や配置、役割が一定程度明らかにできると考えられていて、実際にこの書はそのようになっている。言葉を言葉として吟味し、それそのものに即して診断することが、むしろその言葉が書かれた背景を明らかにすることがあるのだ。

このような分析の手続きの見本を得て、従来为国語科の言語の教育、数学科の形式的論理の教育、さらには社会科の公民的資質の育成等をつなげる、「情報リテラシー」の教育を構築することの必要性をあらためて感じた。私たちは真摯に、新しいいかなるリテラシーも提唱してこなかったこの非専門家からのいくつもの本質的な問いかけや指摘を受けとめなければなるまい。